

PBeM『VOiCE』第1回リアクション

01-B 花と歌のあとに

● When you wish upon a star, a prayer to the witch.

子どもたちはもうそろそろベッドに入る時間帯。

星だけが静かに、その少女を見守っていた。

長いふたつの三つ編みの少女——葉柴芽路はしばめろが、周りをうかがいながら、そっとそこへやってくる。

きよろきよろとあたりを見回して、誰もいないことを確認すると、さっとその場にしゃがみこんだ。

彼女を知る人が見たら、いつになく不安げな表情を浮かべているのを、いぶかしんだことだろう。

「……ううん、魔女が言ってたじゃん。きっと、必ず……」

● Let us, then, be up and doing, With a heart for any fate.

病院は嫌い。

みんなは学校へ行けるのに、自分一人だけ、病室で過ごしているから。

——クラスメートは、わたしもいることを覚えているかな。

衛宮さつきは、ペイントアプリで絵の具を混ぜる指をふと止めて、窓の向こうを眺めた。

いつもと変わらない風景。いつもと変わらない部屋。昨日もそうだった、今日もそうだ。だから、明日もきっと同じ。

この部屋で、さつきはずっと過ごしている。

「さっちゃん、検温の時間ですよ」

金髪の看護師が、そう言って病室にやってくるまで、さつきの幼い指は止まったままだった。

病院は好き。

もう一人の自分に会えるから。

——青葉がいれば、家に鏡なんていらなくなる。

八代青海やしろあうみは赤いケープをかぶったまま、慣れた足取りで、もう一人の自分——双子の兄の青葉の病室へ向かった。

いつもと変わらない風景。いつもと変わらない部屋。昨日もそうだった、今日もそうだ。明日もきっと同じ。

あの部屋で、青葉は青海が来るのを待っている。

「今日の授業でね、ローマン先生がこう言ったんだ、……」

金髪の看護師が面会時間の終了を告げに、青海の肩にそっと手をのせるまで、鏡合わせのような二人はずっと話していた。

白い壁、白い床。白いベッド、白い枕。

機能性を重視したその建物は、ふたつの丘のシンボルだ。

万が一に備え、大量の人間をできるだけ収容し、治療を施せる場所。それがこの街の始まりでもあり、存在する理由でもあった。

そこに、キルシ・サロコスキは自分の意志で入院した。

もうここからは出られない——そういう可能性も受け入れられる覚悟を決めて。

● A good beginning makes a good ending.

体育の授業が終わると、校庭から昇降口に向かって競いあって走っていく者と、歩いて帰ろうとする者、たいてい二種類に分かれる。

百日紅さるすべりメリサは常に後者だった。

同じように歩いて帰っているライサ・チュルコヴァの隣にするりと並ぶと、話しかけた。

「ねえ、ライサさん」

「ん、何？」

「キルシ先生、いつ退院できるのかしらね」

入院してしまった担任の名を聞くと、ライサは表情を曇らせた。

「そうねえ……まさか帰ってこないなんてことは、ないと思うけど……」

「早く帰ってこられるように元気づけたいわね。……そうだわ、お見舞いに行くなんてどう？ ローマン先生はああ言っていたけれど、行った方が絶対いいに決まってるもの」

そう言いながら、ちらりとライサの顔を伺う。

「わたしも行きたいわ、当然よ！ でも、なんだって皆、わたしを誘おうとするの？」

「あら、どういうこと？」

「昨日、花音も同じようなことを言ってたわ」

そうなの、とメリサは応えつつ、考えを巡らす。

お見舞いに行くのは、おそらくクラスメート全員の総意と思っていざらう。それはいいとして、そもそもいつ行くのかさえ決まっていないのが現状だ——行きたいね、と誰が言い、行きたいね、と誰かが返す程度で。

それぞれがバラバラに行っても、キルシ先生にはかえって迷惑だろう。ましてや、場所は病院なのだ。一度に大勢で押しかけて、その中の誰かが叱られるようなことでもあったら面倒だ。

「そう……でも、私はクラス全員で行くことはないと思うの。だって、そんなことをしたらキルシ先生にも、病院にも迷惑をかけてしまうかもしれないでしょう？」

「うーん、そうなのよね。だいたい、病室ってクラス全員入れる広さじゃないわよね、たぶん」

メリサの言葉に、ライサは頷いた。ここは押すタイミングだろう、メリサはそう思った。さり気ない風を装いつつも、

ライサにたたみかける。

「だから、まずはローマン先生に言って、それからお見舞いに行く代表者を決めて、その人たちが行けばいいと思うのよ。それなら、病院にも迷惑はかからないわ、きっと」

それもそうね、とライサが言うのを逃さず、メリサは言った。
「私は貴方、ライサさんが代表になればいいと思うの」
「は？ わたし？」

メリサはそっと微笑んで言った。
「だって……ライサさん、しっかりしている人、ですし」
「ま、まあ、そこまで言われちゃうとね……」
何気なく流そうとはしているようだが、まんざらでもないようだ。メリサは笑みを深めた。

● Save up for a rainy day.

放課後の職員室に入るのは、なんだか勇気がいる。叱られるわけでもないのに、なんだか足が進まない。

樫雫は、扉の前で少し躊躇したものの、意を決して中へ入った。目当ての人物を見つけると、なんとなく早足で近づく。

「おや、どうした？ 珍しいね」

図書室や保健室と違い、職員室は気軽に生徒が入って、おしゃべりを楽しめる場所でもない。ローマン・ジェフリーズは不思議そうな面持ちだったが、空いていた椅子を引き寄せると、雫を座らせた。

「どうした、何かあったのかい？」

ローマンはまっすぐ雫に向きあうと、穏やかにそう切り出した。

——あれ、なんだか心配されてる？

雫は、あわてて言った。

「あ、あの、違うんです、キルシ先生のことで……」

「キルシ先生なら、この間、先生たちでお見舞いに行ったけれど、元気そうだったよ。学校に来ていた頃と変わらない様子だったね」

その言葉に雫はほっとため息をついた。同時に内心、少しだけむっとする——私たちをおいて、お見舞いに行ってしまうなんて、ずるいわ。

「よかった……。あ、それで、先生に相談というか、お願いというか……」

「お願い？」

「お見舞いのことです。あの、やっぱり、勝手に行ったらいけないと思って……病院に伝えておいてほしいんです、お見舞いに行きたいって。あと、いつ行ったらいいか、とか」
「ああ……」

一瞬、表情が陰ったように見えたのは、気のせいだろうか。
「それなら……そうだね、先生としては、社会科見学が終

わってからがおすすめだね。発電所に行ってどんなことを勉強したか、お見舞いに行った時に話せば、雫がきちんと勉強していることをキルシ先生はきっと喜んでくれるはずだよ。くれぐれも、学校をさぼったりなんてしないように」

ウィンクしながら——手先も不器用なら目元も不器用なのか、ウィンクの概念からやや外れてはいたが——ローマンは朗らかに釘を刺す。

「まあ、雫なら、そんな心配はいらないって、先生は信じているけどね。キルシ先生と病院には、先生から連絡をしておこう。他にお見舞いに行きたい子がいたら、社会科見学の後に行くように、伝えておいてくれないかい？」

「はい、ローマン先生」

深く頷くと、雫はローマンに一礼して職員室を静かに出ていった。スキップしたくなるのを、一生懸命我慢しながら。

● No road is long with good company.

その子どもは、はたして少年と呼ぶべきか、少女と呼ぶべきか——黒葛野鶯を知らない者が、必ず悩む問題だ。

遠くから見れば少女、近寄って見ても中性的な容貌と、長いポニーテールという少女らしい髪型で、どうやっても判断に苦しむ。

ライサも、クラス替えて初めて鶯を見た時は、てっきり自分と同じ女の子かと思ったほどだ。その日の夕方には、クラス全員が最初の印象は間違いだったと分かったが。

一日の授業が終わり、暮れていく日とともに、子どもたちが各々の家へ帰っていく。彼らの長い影の間を縫うように、ライサは一人で帰路につこうとしていた。

「ライサ」

突然呼びかけられ、ライサは声のした方向へ振り向いた。そこにいたのは、鶯だった。夕暮れの逆光を受けて立つ鶯は、単刀直入に話を切り出した。

「オレと病院に、見舞いに行かないか」

「……デートなら、もうちょっと気の利いたところに行くべきだと思うけど」

呆れたようにライサが返す。

「な、」

唐突に出てきた「デート」という単語に、鶯は思わず動揺する。

「冗談よ。ばかね、間に受けないでよ」

「……とにかく、話はさっき言った通り。学校帰りでも、休日でも、どちらでも構わない」

「どちらでもって……ねえ、なんでそこまで病院に行きたいの？ キルシ先生のお見舞いなら、クラスの皆で考えてるじゃない」

「……オレの母さんが入院してる」

「……そう」

途端に、ライサの顔がこわばる。

「それに」

「それに？」

「……道、が」

「……ああ」

お互いに、ため息混じりに頷き合う。鶴の驚異的な能力は、ライサももちろん知っている。彼が学校帰りに寄り道などしようものなら、それは寄り道というより遭難と呼んだ方がいい事態に陥りかねない。

「母さんの病室は分かるんだ。でもキルン先生は、その、」

「もういいのよ……」

ライサはそっと鶴の肩に手をおいた。

「わたしでよければ、エスコートするわよ、ほんとにもう……」

ライサの目はクラスメートを見る目というより、もはや保護者の目だった。

● Boys will be boys.

ドクター・シュトライヒリングは悩んでいた。

看護師からの報告を受けたときは、大した問題ではないと思った。だが、廊下を曲がって聞こえてきた音に、どうやらいつものようにはいかないということを悟り、気持ちを切り替える。

彼の患者の一人である穂刈幸子郎は、いつになく真剣な顔で病室——2012号室にいた。電子リコーダーを吹き鳴らしながら。

「……君が音楽が好きだということはよく知っているが」

ドクターは病室の窓をきっちり施錠し、少しでも音が漏れないように試みた——はっきり言って無駄だったが。すべての施錠を確認すると、幸子郎に向き直った。

「会話は言葉で行った方が、スムーズだよ」

幸子郎は、まっすぐにドクターを見つめながら、ひときわ高らかにリコーダーを鳴らした。ドクターはため息をつきそうになるのをこらえながら、病室の隅で縮こまっている金髪の看護師に尋ねる。

「これはどういうことだね？」

「社会科見学に行きたいと以前から言っていて……今日はいつになく、その、アピールが激しくて……」

「ふむ。しかし、なんでまた、リコーダーなんだね」

問いかけても独り言ともつかない言葉に、看護師は一層縮こまってしまった。

「その、……リコーダーが上手に吹けたら、許可が下りると、そう思ったようで……」

「なるほどねえ……」

さて、どうしたものか。ドクター・シュトライヒリングは、もう一人の担当医であるドクター・ベネットと小児科のドクターにも来てもらうよう看護師に命じた。

● You must sow before you can reap.

雫がローマンからの「お見舞いは社会科見学の後に」という話を伝えると、それはあっという間にクラス中に広まった。

日取りそのものはあっさりと決まったものの、問題は「誰が行くか」だ。いつの間やら、お見舞い計画の中心人物になっているライサが、全員で行くのではなく、クラスの代表が行くべきだと言うと、数名が立候補した。

「皆行きたいのは同じなんだから、平等にくじびきで決めたらいいんじゃないかなって思うんだけど……」

という片岡春希かたおかはるきからの提案は、その場の雰囲気、やんわりとなかったことにされた。

本人たちの意気込みと話し合いの結果、お見舞いに行くのは、ライサ・チュルコヴァ、百日紅メリサ、樫雫、黒葛野鶴、菜月加奈、クロワ・バティニユの六人に決まった。

病院へ行く日が決まってからというもの、クラスの話は社会科見学の予習などそっちのけで、お見舞いの話でもちきりだ。特に、お見舞い代表に決まった者には、あれこれとやらなければいけないこともある。

そのひとつが、「お見舞いのプレゼントを決めて、用意する」ことだった。クラス代表とはいえ、なんだかんだ言って個人の意思が優先されてはいるのだが。

「お見舞いって、何を持って行ったらいいかなあ？」

放課後の教室で帰り支度したくをしながら、クロワが悩ましげにそう言うと、加奈はのんびりと、だがどこか誇らしげに言った。

「私はねえ、もう決めてあるんだあ」

「えっ、すごーい。加奈はもう決めたのお？ 何を持ってくの？」

「えへへ、それはねえ」

「うんうん」

クロワが思わず身を乗り出す。

「な・い・しょ♪」

「え〜、ずる〜い！ あっ、ねえねえ、芽路！ 先生へのプレゼント、何がいいかなあ？」

不意に呼びかけられた芽路は、歩きながら通学用のリュックを背負いつつ、保健室でもらってきた絆創膏ばんそうこうを右肘ひじに貼ろうと、悪戦苦闘している真っ最中だった。

「……うーん。なんか、こう、記念になるような、よっ、ものがいいんじゃない？ なんとなくだけど」

「そっか〜」

結局うまく貼れずに、リュックもずり落ちかける芽路を見か

ねて、加奈が絆創膏を代わりに右肘の擦り傷に貼ってやる。すると、芽路は礼を言いながら、さっさと教室から出ていこうとした。

「あれ〜、帰っちゃうのお？ 芽路お、一緒に悩もうよー」
「芽路ちゃんもお見舞い代表、入るでしょ？ ライサに言えば、たぶん連れてってくれるよ」

クロワと加奈の言葉に、芽路はしばし考えこむようにうつむいて、だがそのまま教室のドアを開けた。

「やることがあってさー、それに」

「それに？」

「なーんでもなーい」

歌うようにごまかすと、芽路は一目散に昇降口へと向かう。途中、ルーチェから「がさつ貧乳、廊下を走ったらいけないうんだぞー！」と言われたので、せっかくなので蹴っておいた。クリティカルヒット。

おまじないで叶えたいことは他の人に言っちゃだめなんだ。言ったら、効き目がなくなっちゃう——魔女のおまじないとは、そういうものだ。

最近、あの周りで何やらやろうという話をよく耳にする。まさかとは思いますが、注意しておくに越したことはないだろう。そう思って、芽路は夕暮れの道をひた走る。あれは大事なものだから、誰にも邪魔させないし、されたくない。

だから、そこでエルシリア・ソラを見た時、頭が真っ白になってしまったのだ。

「だめ！」

後の祭り。芽路のまだ十年ほどの人生には、なぜかその言葉がよく似合った。

結局、考えた末にクロワは、クラスメート全員のメッセージやクラスの風景を撮った映像データを持っていくことにした。だから、ジェシー・ジョーンズからの誘いは、渡りに船とばかりに二つ返事で承諾したのだ。

「ちょうどねえ、これからクラス全員の動画を撮ろうと思ってたんだ〜」

父から借りてきた小型のカメラを持って、ジェシーの後ろについていく。

「だったら、これは最高のチャンスよ！ 古代遺跡の謎を解明する瞬間をとらえられるかもしれないもの！ ううん、とらえるのよ！」

ジェシーは嬉しそうだ。そんなジェシーを見て、クロワも嬉しそうに微笑むのだった。

ジェシーたちは探検部なる組織を立ち上げたらしい。気がついたらメンバーになっていたが、まずは自分の目的を達成せねばならない。キルシ先生のお見舞いに持っていく

ために、メッセージ映像を作るのだ。

「はーい、じゃあジェシー。笑って。キルシ先生にメッセージをどうぞ〜」

カメラのファインダー越しに見る友達の笑顔は、なんだかいつもと違うようで、新鮮に見えた。

● Make hay while the sun shines.

2012号室からのナースコールを受けて、金髪の看護師は足早に病棟を歩いていた。歩きながら、意識は患者のことに集中し始めている。

だから、最初は服の裾がどこかに引っかかったのだろうと思ったのだ。だが、廊下の真ん中に、服の裾を引っかけるような要素があるわけもなく、それは明確な意志を持った行為だった。

「キルシ先生のお部屋はどこですか？」

そう問う少女の顔は真剣で、まっすぐに看護師を見上げている。

「キルシ・サロコスキ先生のお部屋は、どこですか？」

もう一度問われて、ようやく看護師は少女がお見舞いに来たのだと悟った——あれ、でも今日は休みだったっけ？

「どこですか？」

三度も問われたら、答えるしかあるまい。ナースコールはさっきから鳴りっぱなしで、そろそろ2012号室の患者は痺れを切らす頃だろう——待つことが、少し苦手な子だから。

「ありがとうございます」

元気よく答えると、少女はぱたぱたと走っていった。

「ああ、走らないで！」

そう呼びかけつつ、看護師は頭の中にカレンダーを思い浮かべる。やっぱり今日は休日じゃない。

平谷杏樹は、教えてもらった病室に迷わずたどり着くと、ノックとほぼ同時にドアを開けた。

そこには、驚いた顔で杏樹を見つめる女性がいた——キルシ・サロコスキ。入院中の、杏樹の担任教師だ。学校ではいつも髪留めでまとめられていた髪が下ろされて、教室で見っていた時とは雰囲気が違う。

「キルシ先生、おはようございまーす！」

元気よく、今までのように挨拶をする。

「え。えっと……」

キルシは突然のことに事態が飲み込めないのか、まじまじと杏樹を見つめた。

「ええと、杏樹？ どうしたの？」

「お見舞いに来たの！」

そう言って、杏樹はバッグから小さな包みを取り出した。ミシェーラ・ベネット主催のチョコ作り練習教室で作った

チョコレートだ。手作りといっても、杏樹がやったのは、チョコレートを湯煎で溶かして、型に流しこんで冷やすことだけだが。

「はい、これ。先生にバレンタインのチョコレートだよ」

目の前にずいと包みを差し出すと、反射的に受け取ったキルシが不思議そうに言った。

「あの、杏樹？ 学校は？ 今日はどうしたの？」

「今日はお休みだよ」

——普通の授業は、という言葉が本来続くべきなのだが、杏樹はそれをさらっと省略した。

今日はお休みだ。なぜなら、杏樹がそう決めたから。

社会科見学の日ではあるが、お見舞いに行かねばならないのだ。なぜなら、今朝ふと思いついたから。

「えっ？」

キルシはずいぶん驚いたようだった。

「えっと、そう、だったかしら。あれ、でも……今日って……あれ？ そうだったかしら……？ えっと……」

何かを思い出そうとするように、遠くを見つめながら首をかしげるキルシに、杏樹は言った。

「今日はお休みなんだってば。ねーねー、そんなことより！

チョコ、食べてみて！ 私が作ったんだよ」

「えっ、ええ、そう、ね。お休み、……お休み、ね。うん。チョコレート作ったの？ 杏樹はお菓子も作れるのね」

ぎこちなく微笑みながら包みを開けるキルシの姿を、杏樹は満足げに見つめていた。

——当然、家に帰ったら猛烈に怒られた。

● Everything is funny as long as it is happening to somebody else.

今日もまた、青海は青葉に会いに来た。

いつもと同じように、学校のことを話し、病院のことを聞き、看護師が面会時間の終了を告げに来るまで他愛ない話をする。青海にとって、それは青葉への償いなのかもしれない。両親が、そんなに頻繁に行かなくてもと言うほど、彼女はかたくなに青葉に会いに行き続けている。ロビーから小児科の入院病棟へ歩いて行く途中、青海は見知った一団を見つけた——気づくのは青海が早かったが、行動は向こうのほうが早かった。

「あれ？ 青海じゃない、どうしたの？」

銀髪の少女——ライサが、青海に向かって早足でやってくる。「青海もキルシ先生のお見舞い？ だめじゃない、勝手に来ちゃ！」

——ああ、そういえば、お見舞いって今日だけ。

クラスの女子たちが盛り上がっていたのを、青海は思い

出す。お見舞いは代表者のみで行くといつの間にか決まっており、ライサは青海が勝手についてきたと思ったのだろう。「もう……来ちゃったんなら仕方ないわ。青海もおいで」「うん」

つい反射的に頷いてしまった。そのままライサに手をひかれ、本来の目的とは違う病棟へ向かう。まあ、これもいいか、青海にみやげ話ができるから——青海はそう思ったものの、このお見舞いがいったい何時に終わるのか、気が気でなかった。

● Health is not valued until sickness comes.

「2018号室……ここね」

ライサが病室を確認する。ローマンから教わったとおり、角部屋の2018号室には、はたしてキルシ・サロコスキの名が表示されたプレートが掲げられていた。

「だ、誰がノックする？」

「せーの、でいくわよ」

「え～、私がやりた～い」

「だめよ、こういうのはやっぱりふさわしい人が……」

そうやって盛大なじゃんけん大会が始まりかけた時、ドアがさっと開かれた。

「まあ、いらっしやい！」

まるで友達を家に招いた時のように、キルシはにこやかに少女たちを出迎えた。少女たちは気まずさに顔を見合わせたか、そんなことにはお構いなしとばかりに、キルシは教え子たちを病室に招き入れる。

「なんだか……寂しいお部屋」

雫がぼつりと眩く。白い壁、白い天井。飾り気も愛想もないその部屋は、若い女性が日々を過ごすには、あまりに殺風景だった。

「ありがとう、みんな。わざわざ来てくれて」

個室のため、全員入ることはできたが、さすがに椅子が足りない。キルシはしばらくどうしようか迷っていたが、ないものはないと諦めて、ひとまずベッドに腰かける。

「ごめんなさいね、椅子もないし、お茶も出せなくて」

どぎまぎしながら後ろ手にお見舞いのプレゼントを隠す教え子たちを、キルシは懐かしげに見やる。

「キルシ先生、これ、みんなからのメッセージです」

代表して、ライサとメリサがメッセージ映像が入ったデータカードと、カンパで購入した花束をキルシに手渡す。

「クロワが撮ってくれたんです。クラス全員が映ってます」

「そう、そうなの……」

キルシは目を細め、小さなデータカードを愛おしそうに撫でる。

「私はねえ……これで一す！」

加奈が、満面の笑みで取り出したそれは、^{ごとんと}重い音を立てて、サイドテーブルの上に置かれた。

「……な、に、これ」

「鉄アレイ！」

「あ、うん、それは、知ってる……」

およそ病室には不似合いな、堂々たる風格の鉄アレイ。

「いや、あの、なんというか……」

少女たちがお互いに目配せしあう。これはボケか？ ボケなのか？ 誰かツッコめ、早く。

「まあ！ ありがとう、嬉しいわ！」

「へ？」

キルシの思わぬ言葉に、少女たちは思わず声を上げる。

「とっても助かるわ！ ベッドで寝てるだけじゃ体がなまっちゃうのに、さすがに病院じゃちょっとした体操くらいしかできなくて……。でも、これならベッドの上でだって体が動かせるわね」

新発売の香水のボトルを眺める少女のように、キルシはうっとりとしている。

「よかった～！ 私もがんばって鍛えるから、先生もがんばってね！」

「ええ、負けないわ！」

ああ、そういえばキルシ先生は意外と肉体派なんだっけ……少女たちはそう納得することで、病室に鉄アレイという光景を前に、いやここはツッコむところだろ、という内なる衝動を抑えるのだった。

お見舞いに歌を歌おうと思っていた雫だが、キルシ以外の人の前で歌うのは恥ずかしい上、どうも歌うような雰囲気でもない。

——また、今度かなあ。

雫はそっと胸の中に、歌声をしまいこんだ。

「ねえねえ先生、再生してみて！」

クロワがデータカードをキルシのタブレットのデータスロットに挿入する。

「大人の人って、寂しくなったりするの？」

「ええ、そうね。大人も寂しくなる時はあるわ」

「えへへ、じゃあね、もう大丈夫だよ！ これでわたしたちのこと、いつでも見られるから、もう寂しくないよ～」

自動再生された映像には、クラスの面々のメッセージや休み時間の風景などが詰まっていた。

かつては見慣れた、ごく当たり前だった風景が、今のキルシには何よりも懐かしく、そして遠く思えた。

「ありがとう、大事にするわ。何度だって見る」

その言葉に、少女たちにもほっとした空気が流れるのだった。

やがて面会時間の終了が近づき、病室にはキルシの主治医であるドクター・ベネットがやってきた。どうやら彼女はキルシに検査の話をする予定だったらしい。だが、病室の雰囲気を見て、ロビーまでの見送りをキルシに許可した。病室からロビーまでの、さほど長くない距離を、少女たちは名残を惜しむようにゆっくり歩く。

「あら、ライサさんは？」

ふと、メリサはライサと鶴がいなくなっていることに気付いた。

「なんだか、この次の約束があるんだって言ってたわ」

「ふうん……」

「どうしたの、さあ行きましょう」

キルシに呼びかけられ、メリサは素直に従った——まあ、誰にだってそれぞれ都合があるわね、たぶん。

● Every rose has its thorn.

「間違いない、こっちだ！」

「そう言って、さっきも間違えてたわよね……」

自信たっぷりに言う鶴に、ライサは冷たく言い放つ。

二人はキルシへの見舞いを終えたあと、鶴の母に会うため、病棟内をさまよっていた。

「部屋の番号が分かっているのに、どうして道に迷うのよ……」

結局、鶴から病室の番号を聞き出したライサが、通りすがりの看護師に尋ねて、ものの三分で目的地にたどり着いた。

「い、いいじゃないか、別に……そういう日だったんだ、今日は」

鶴はまったく説得力のない返答をしつつ、ぎこちなく病室のドアをノックすると、ライサに目配せをして病室へと入った。ライサも、一瞬迷ったものの、鶴と同じように病室へと入っていく。

「雀、雀なのね？ ああ、お母さんに顔をよく見せてちょうだい」

鶴とどこことなく雰囲気の似た、線の細い女性が嬉しそうにベッドの中から、鶴を手招きする。

「うん、お母さん」

雀と呼ばれた鶴が素直に頷くのを見て、ライサは怪訝そうに眉をひそめた。

「あら、雀のお友達？」

母親はひとしきり鶴の髪を撫で梳いていたが、ライサの存在に気づいたのか、鶴に尋ねた。

「うん、ライサちゃんっていうの」

「そう、雀にも素敵なお友達がいてよかったわ」

母親は、鶴の髪を撫でる。

その目はライサも鶴も見えない。

「……どうのこと？」

病室を出て、ロビーへ戻るまで、二人はずっと無言だった。ロビーのざわめきに人心地ついたのか、ライサは唐突に鶴に向き直る。

「……見ての通りだよ」

鶴の言葉に、ライサは何か言いかけて、盛大にため息をついた。

「まあいいわ……」

そして肩をすくめて、鶴の顔をじっと見つめる。

「——かわいそうな雀ちゃん」

そう言って、薄く笑ってみせた。

● If there were no clouds, we should not enjoy the sun.

「じゃあ、先生また来ます」

「ありがと、今度はまた別の子も来られるといいわね」

午後の散歩から病室へ戻ろうとしたさつきが、彼女たちを見かけた時、とっさに取ってしまった行動は「隠れる」だった。

何も隠れる必要はない。そう頭では分かっている、かなり前にクラス通信で顔を見た以外、顔も名前も忘れかけた——きっと、相手もさつきのことを忘れてのことだろう——クラスメートたちの中に入っていき勇気は、どうしても出なかった。

——キルシ先生のところには、みんなが会いに来てくれるのに。

ずきん、と胸が痛む。

心臓の痛みとは違う痛み。

それを何と呼ぶのか、さつきは知っていたが、認めるわけにはいかない。

「……さつき？」

不意に名前を呼ばれ、振り返る。そこには、キルシが立っていた。

「どうしたの、こんなところで。かくれんぼ？」

腰をかかめて、さつきと目を合わせながら、キルシはそう尋ねてくる。さつきは、とっさに笑顔を作ると、逆に聞き返した。

「どうしたの？ 先生も病気なの？」

「そうね、そう……先生も、病気よ」

さつきの言葉にキルシは微笑むと、そっとさつきの髪を撫でた。急に泣きたくなったのは、その手が思っていたより暖かかったからだ。さつきは、そう思うことにした。

● Everything comes to him who waits.

お見舞いの翌日、学校が始まると、お見舞い代表団はローマンに、放課後になったら職員室へ来るように言われ

た。メリサは、ライサと鶴に気付かれないように、その背をやんわりと睨みつける。だが、メリサの心配は杞憂に終わった。

「もしよかったら、これからもキルシ先生に会いにきてあげてほしい。もちろん、いたずらしたり、病院内で騒いだりするの禁物だが」

画面越しのドクター・シュトライヒリングの言葉に、少女たちは思わずわっと歓声を上げた。

「ほんとに？」

「いいんですか!？」

「やったー！」

「そのように、騒ぐことも控えるように」

途端に釘を刺され、互いにバツが悪そうに顔を見合わせるものの、どうしても笑顔は隠せない。

その様子に、ドクターは苦笑するとともに、ふと娘の顔を思い浮かべる。あの子も、クラスメートの前では、この少女たちのように、歳相応の屈託のない表情を見せるのだろうか。

少女たちの関心は、そんなことをふと考えているドクターではなく、次のお見舞い計画へと移っていた。次はいつ来るか、何を持ってこようか、来れなかったあの子も呼ぼう、どうせだったらクラスみんなで——あっという間に、かましい相談が始まってしまった。

ローマンは手を叩いて、少女たちの相談を打ち切らせる。「さあ、ドクターのお話はもうおしまい。もう遅いから、早く家へ帰りなさい。くれぐれも、寄り道もしないように」

は一い、と少女たちは素直に答えるものの、はたしてどこまで自分の言うことを聞いているだろう。わいわいと教室へ戻っていく後ろ姿を見送りながら、ローマンはコーヒーを淹れに行くのだった。

● All work and no play make Jack a dull boy.

夕食を終えた後、いつものようにさつきはタブレットを胸に抱えて、キルシの病室を訪れた。

「こんばんは、さつき」

「こんばんは、キルシ先生」

お互いにぺこりを頭を下げる。それが「授業」が始まる合図だ。さつきとキルシ、たった二人の夜の学校が始まった。

さつきはキルシのベッドの横に椅子を持ってくと、ちょこんと座って、教科書アプリを起動させる。これまで起動しても、眺めるだけで終わらせてしまっていた教科書が、今はかけがえのない大切なものに思えてくる。授業のデータ自体は自動で転送されてはくるものの、一人ぼっちでそれを眺めたところで、何も楽しくなかった。それが今ではどうだろう、教科書を開くのがこんなに楽しいなんて、さ

つきは初めて知った。

「じゃあ、えっと……今日はここからね。56ページを開いて」

キルシの言葉に、さつきは首をかしげた。

「ここ、おとといやったよ?」

さつきがそう言うと、キルシは虚をつかれたのか、持っていたタブレット用のペンを落としてしまった。

「えっ……そ、そうだったかしら」

「そうだよー。ほら、ここ、ちゃんとできたから、わたし丸印をつけておいたもん! えへへ☆」

さつきが自分のタブレットをキルシに向けて見せる。そこには確かに、さつきの字で「できた!」という文字とともに大きな丸印がついていた。キルシは、その誇らしげな赤い丸をしばらく見つめた後、言った。

「え、あ、ごめんなさい。先生、うっかりしちゃった」

「あはは、先生いけないんだー」

先生でも忘れちゃうんだね、とおかしそうに笑うさつきに、キルシは曖昧に微笑んだ。

● When you can tread on nine daisies at once, spring has come.

「ごめんなさいね、今、キルシ先生は検査中で……」

金髪の看護師が、せっかく来てくれたのにね、と残念そうに告げる。

病院の壁は無表情に白く、芽路は急に悲しくなった。

「……また、来ますって、先生に言っといってください」

芽路はそう答えて、ぺこりと頭を下げた。そして、すっと踵を返すと、何事もないような素振りを装って、すたすたと去っていく。

花はまだ、咲かない。

登場 PC・NPC 一覧

【登場 PC】

- ・八代青海
- ・百日紅メリサ
- ・樗牛
- ・黒葛野鶴
- ・平谷杏樹
- ・菜月加奈
- ・葉柴芽路
- ・衛宮さつき
- ・クロワ・バティニュー
- ・穂刈幸子郎

【ちょっとだけ登場】

- ・ミシェーラ・ベネット

【NPC】

- ・八代青葉
- ・キルシ・サロコスキ
- ・ローマン・ジェフリーズ
- ・ライサ・チュルコヴァ
- ・ドクター・シュトライヒリング

【ちょっとだけ登場 NPC】

- ・ドクター・ベネット
- ・片岡春希
- ・ルーチェ・ナーゾ